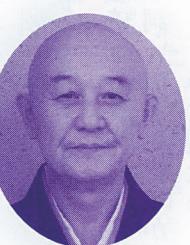
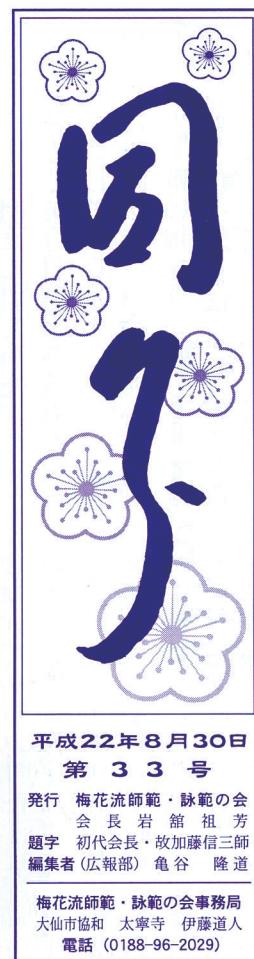


おどくの池に いみじくも
にぎ 潁りに染まぬ 蓮の花



〃梅花が生命〃

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 岩館祖芳

お変わりありませんか？ この夏の暑さは、異常の中にも異常でしたが、体調を崩したり熱中症になつたりしませんでしたか？

私は万全を期して、アルコール消毒に心がけました。（エッ効果？『ウームムム』）おからだ、くれぐれもお気をつけ下さい。

今年五月、世寿百歳の講員さんがお亡くなりになりました。この一、二年、病を得て臥し身がちではありますたが、菩提寺様の行持を欠かさぬ、信仰一途の方でした。取り分け梅花はリーダーとして、世話役として、長く方丈様、奥様を支えられて來た方でした。「先生、おかげ様でした。あの世への良いお土産になります。」二年前の県北大会。ぜひにと『拳唱司』をお願いした。車イスでの登壇。司会の方の「九十八歳……」との説明に場内驚きの声……。落ち着いた堂々とした「お誓い」。『お願いして良かつた』と思つた瞬間、身のふるえるような、深い感動が全身をつらぬいたのを覚えてます。

『梅花は生涯の友です。おかげで、元気と長生きを頂きました。』そうおっしゃつておられた姿が今も浮かんできます。

全国大会で、久しぶりに会つた講員さんが『私、朝と夕方、お經とご詠歌をあげてるんです。』と。般若心経、修証義は全部。そして三宝と紫雲とおつしやる。『スゴイ。』というと、『私の仕事ですから。』と。ご主人様の死が、梅花へのきつかれらしい。

『お唱えしていると、さびしさも、世間のわづらわしさも、全部忘れるんです。浮き世の波を……でしょう。』更に『でも、私ってダメです。自分本位で。……我等と衆生と皆共に……』とは参りません。』教えに生きようとする姿に、恥じ入るばかりでした。

今号は、たくさんの出会いの中からお二人の『梅花を共行き』の人生をご紹介申し上げましたが、お読み下さっているあなた様も同じお気持ちと存じ上げます。

それにしても、『梅花つて、なんてスバラシイんでしよう。』

『梅花流の源流を求めて』

昨年開催した県北奉詠大会にアトラクションとして密厳流の登壇奉詠がありました。歌詞も譜面も違うのに曲は同じ。梅花流の源流がそこにありました。御詠歌の誕生から梅花流までの流れを今一度振り返ってみたいと思います。

巡礼歌から御詠歌へ

御詠歌の最初は花山法皇が作られた三十一文字の和歌の奉納であり、法皇の西国三十三觀音靈場巡礼に始まつたとされている。

人々巡礼 자체は以前からあり、人々は観音菩薩の救いを求めて願を掛け巡拝することは古く奈良時代（七一〇年頃）から行われていた。

法皇は寛和二年（九八六年）愛妃弘徳殿の御早世により切なる無常感を起し、皇位を捨てて出家、巡礼を発願された。その行く先々で法皇は自然、風景、風土を詠み、観音信仰と靈場礼讚を加え、掛詞を使用し心情を織り込んで、和歌を奉納した。その和歌に簡単な節を付けて唱えだしたのが「巡礼歌」となり、遍路節、賽の河原節と各自独自の節で唱えられていた。

御詠歌として今日各宗各流派で唱えだされたのはごく近世のことである。最初に四国松山の山崎千久松という人が三十三番の御詠歌を新しく節を付けて唱えだした。名付けて大和流といふ。

密厳流から梅花流へ

曹洞宗では静岡県洞慶院の丹羽仏庵老師（大本山永平寺元監院）が、「わが曹洞宗でも御詠歌を」と発願され、昭和二十五年宗務庁に再三足を運び強く進言。翌二十六年詠讚歌研究委員会を発足していよいよ本格的に始動。歌詞制定委員会により歌詞の原案成立する。また密厳流及び各流派（花園流、金剛流、菩提流、大和流、密厳流）の詠匠を集め、

して盛んになり、そこから智山派密厳流、豊山派、東寺流（京節）、ほか浄土宗系流派、臨濟宗系流派と広がり各自独特的特徴を加えて広がつていった。

真言宗智山派は昭和六年に密厳流遍照講を発足。大和流御詠歌に感銘を受けた時の管長様が御親論（おさとし）を発せられ、鈴鉢所作などが整然とした金剛流、節回しに無理がない極めて自然に唱えられ聞く人に感銘をあたえる大和流、それぞれ独特的の節を持ち、それらを参考にして密厳流が誕生した。

密厳流から梅花流へ

曹洞宗では静岡県洞慶院の丹羽仏庵老師（大本山永平寺元監院）が、「わが曹洞宗でも御詠歌を」と発願され、昭和二十五年宗務庁に再三足を運び強く進言。翌二十六年詠讚歌研究委員会を発足していよいよ本格的に始動。歌詞制定委員会により歌詞の原案成立する。（参考、権藤円立「御詠歌の回想」、梅花流指導必携解説編、真言宗智山派HP）

近くの間、新曲が次々と発表され百曲に迫る勢いであるが、その源流を成した密厳流からの伝承曲は二十二曲に及ぶ。

めで公聴会を開き、結果、行持綿密の作法、唱え方も激しくもなく低調でもなく、曹洞宗の性格にふさわしいものとして密厳流が選ばれた。

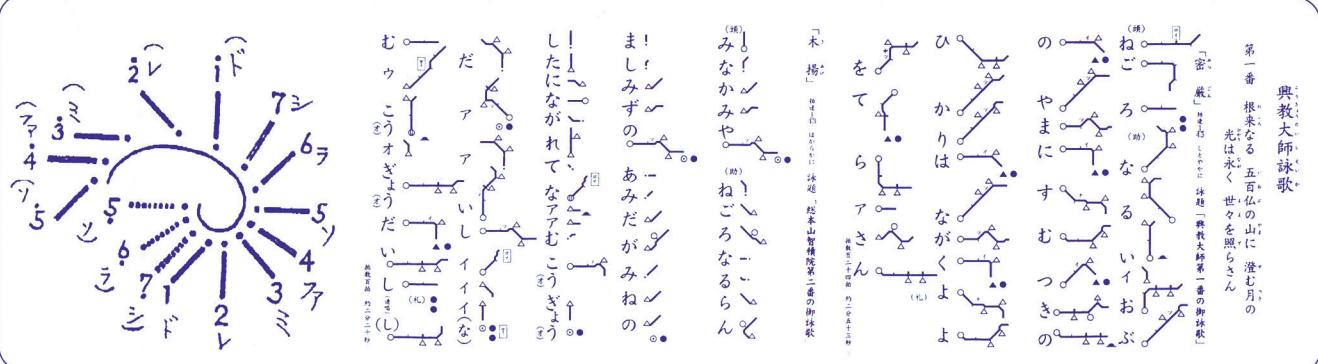
流名は「梅花流」と決定、翌二十七年発足となる。

密厳流からの伝承曲として紫雲は「木揚」。梅花は「密厳」。渙声は「大和」。修証義御和讃は「不動和讃」。誕生、修行、入寂は「密厳流同和讃」より。特に修行御和讃（菩提）は中和讃節による特別な形式によつている。他、法灯は「光明」。讃仰御和讃は「旧いろは和讃」より、となる。

その後、遂に梅花流オリジナルの音譜となり、作法、法具も整い、密厳流の庇護から離れ一本立ちする。作詞赤松月船老師、作曲権藤円立先生の両氏を得て次々と名曲を発表し、他流を凌ぐ曹洞宗梅花流として確立発展し今に至つてている。

現在梅花流では創立してから六十年

文責・龜谷隆道



イタリアに響きわたった梅花

ラヴェンロ国際音楽祭

自性院寺族 鈴木孝子

去る七月三日、私たち邦楽公演一行（十二名）は、尺八と笛・箏・和太鼓、そして梅花流詠讃歌の編成で、日本伝統音楽「和の響き」と題し、ラヴェンロ国際フェスティバルでオープニングコンサートを行つてきました。

会場となつたイタリアの南部ラヴェンロは、ドイツ人音楽家リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）が、この地にあるヴィツラ・ルーフォロ家（13世紀旧貴族）を訪れた折り、庭園のあまりの美しさに感動し、歌劇「パルシファル」を作曲したゆかりの地と言われております。

ワーグナー没後五十年後から、この地で毎年国際音楽祭が開催されるようになり、今年で五十七回目となりました。音楽祭は、毎年七月から九月までの期間に開催され、世界各国の音楽家が訪れて、多くのコンサートとイベントが企画され、期間中は十二万人の観客が集まると言われております。会場のルーフォロ庭園は地中海に面した小高い丘にあり、広大な庭園にはところどころに野外ステージが設けられ、周りには大木が生い茂り、洋風花壇にはきれいな花々が咲き誇つて、ワーグナーが絶賛したという想いを共有致しました。

邦楽公演は、頑強な城壁の側面を利用した石造りの吹き抜けにステージが設けられ、木立が程良い木陰を作り、小鳥たちが絶えずさえずり合うという、自然いっぱいの環境で行われました。

邦楽公演は、頑強な城壁の側面を利用した石造りの吹き抜けにステージが設けられ、木立が程良い木陰を作り、小鳥たちが絶えずさえずり合うという、自然いっぱいの環境で行われました。

邦樂公演は、頑強な城壁の側面を利用した石造りの吹き抜けによる『遍路』のメロディ、「尺八と笛」による『遍路』のメロディ、「和の響き」と題し、日本伝統音楽の音穩やかに「誓願御和讃」。そして御詠歌の鈴の音穩やかに「誓願御和讃」。今回のイタリア邦楽公演は、和樂器と詠讃歌による伝統音楽のハーモニーでしたが、自然豊かな野外コンサートでは、近くの教会の鐘の音や、小鳥のさえずりなどが私たちの音楽と相まって、洋の東西を越えた自然が織りなす感動のハーモニーとなりました。

イタリアにて日本の伝統音楽の普及と禅の世界を、日本の音を通して理解を深めてもらうことを目的にしておりましたが、尺八を初め和楽器と梅花流師範の先生方のお唱えが、ルーフォロ庭園に溶け込み、〈禅の響き〉を敷衍したコンサートとなりました。日本伝統音楽の底流にある精神性と、梅花流詠讃歌の普遍性を再認識したイタリア公演でした。

■プログラム

一、「乱れ」 尺八二重奏『遍路』、『声明』

箏曲『乱れ』、『誓願御和讃』

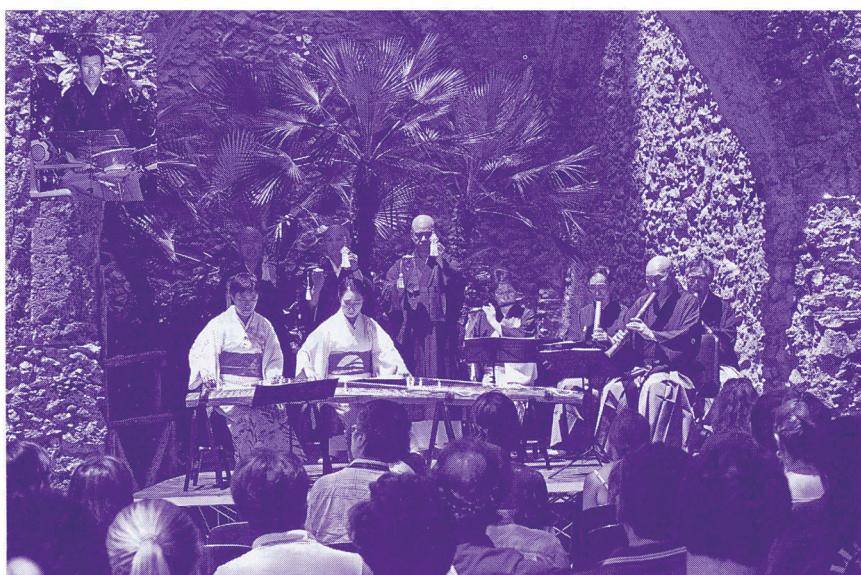
二、「梅花流詠讃歌」 紫雲、高嶺、淨光

三、「近代箏曲 水の変態」 水が雨、雲、雪などの形態を変える様子を題材に

した曲

四、「尺八古典本曲 虚空」

禪宗の一派で普化宗の僧が演奏した曲



和樂器の敬虔なる音色、寂々たる禅の心、仏の声響きわたる

た。講演内容は「和の響き」を主題にして、一乱と静—「禪の真髓」をサブタイトルに設定しました。静寂を破る「鼓の音」、厳かに響き渡る「声明」。突如激しくリズムを刻む「箏と締太

梅花のふるさと

～詠讃歌の生まれた風景〈その十一 太祖常済大師瑩山禪師修行御和讃〉～

観音さまと太祖さま 円通院縁起・二

太祖常済大師瑩山禪師修行御和讃

宝慶の山夏のころ
怒りしひときには母ぎみの
み姿うかびそれよりは
慈悲の聖者となりたもう

作詞 堀 口 義一

◇ 宝慶寺でのできごと ◇

瑩山禪師こと曹洞宗の太祖様は、十一面觀音様に対するお母様のひたすらな信仰のもとにはぐくされました。お母様が亡き後、その菩提を弔うために建てられた円通院の物語に、觀音様とお母様そして太祖様のゆかりが詳しく記されています。

幼い頃から人にすぐれて信心深く、非常に聰明であつた太祖様でしたが、お母様には、太祖様の気性についてひとつのがかりがありました。それは、太祖様は瞋恚の心が人よりも激しかったことです。「瞋恚」とは「怒り」のことと言います。お母様は日頃より持仏としていた十一面觀音様に

次のようにお祈りをくりかえしていました。
「私の息子であるこの僧は、たとえ人よりも聰明にして、群を抜いて智慧が勝れていたとしても、このように瞋恚の気性激しく、これがさらに盛んになるようでしたら、世のために決してなるものではありません。どうぞ觀音様のご加護のお力によつて、息子の瞋恚の心を治めて下さい」

こうしたお母様の心配が現実のものとなるできごとがありました。それは太祖様十九歳の時、永平寺にほど近い福井県大野の宝慶寺でご修行していた時のことでした。この時のようすを太祖様ご自身が次のように記しています。



【福井県大野の宝慶寺僧堂】

に志してこの道に入りました。できることなら仏法の大道を究め、世の人々を救う人となりたいというのが願いでした。それは私の願いであるとともに、母上の宿願でありました。もし今ここで、この道にはずれた行ないに手を染めるようなことがあれば、僧としての私の命など消し飛んでしまうでしょう。このうえは今より以後、決して瞋恚をおこすことなきよう心に誓います。と、このように誓いを立てて以後は、自然にやわらかな慈悲の心がそなり、人々から「大善知識」と言われるようになりました。これもまた母上の觀音菩薩の心になりました。

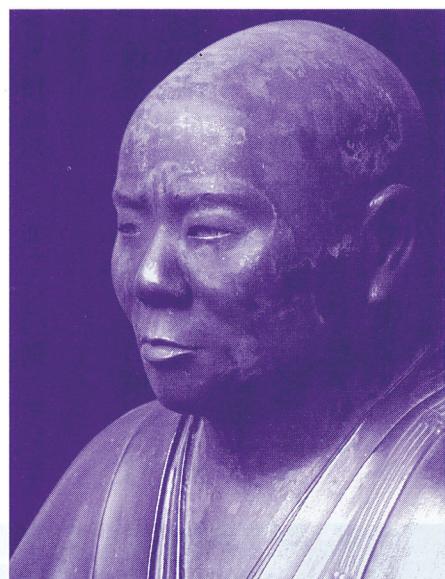
法の大道を究め、世の人々を救う人となりたいというのが願いでした。それは私の願いであるとともに、母上の宿願でありました。もし今ここで、この道にはずれた行ないに手を染めるようなことがあれば、僧としての私の命など消し飛んでしまうでしょう。このうえは今より以後、決して瞋恚をおこすことなきよう心に誓います。と、このように誓いを立てて以後は、自然にやわらかな慈悲の心がそなり、人々から「大善知識」と言われるようになりました。これもまた母上の觀音菩薩の心になりました。

薩への祈念の力のおかげであります。

太祖様の言う「大罪」とはどのようなことか具体的には伝えられていません。しかしあそらくは悪言を出した僧の命に関わるほどのことであつたのでしょうか。もしそれを実行していれば、後の太祖様の行跡は全く別のものであつたかもしれません。太祖様のふつとうする怒りの心をしずめたのは、小さな十一面観音様へひたむきに祈りを捧げる、お母様のお姿だったのです。

◇ 憎りをしずめて ◇

およそ人間には、どんな人にも怒りの心があります。怒ったことのない人などいないといつてよいでしょう。しかし仏教では、だから怒りの心があつてもあたりまえ、とは言わないのでです。瞋恚の心は、むさぼり（貪）とおろかさ（癡）とともに三毒と言われ、もつとも戒められるもので



【太祖瑩山禅師坐像】

ありました。お釈迦様の最後の教えをまとめた『遺教經』というお經に次の一節があります。

弟子達よ、もし誰かが来てその人に八つ裂きにされるようなことがあつたとしても、じつと心をおさめ、決して怒りや恨みの思いを抱いてはならない。もし瞋恚の心をほしいままに解き放つてしまえば、それは自分から仏道を進むことを妨げ、修行によって得られる功德を失ってしまうことになるだろう。はずかしめに耐える「忍辱」の功德は、堅く戒律を守つたり、耐え難い苦行を続けたりすることでは及びもつかぬほど大きなものである。はずかしめられ、ののしられることを喜びをもつて受け入れることが出来ない者は、仏道を行じている智慧者とは呼ばないのである。なぜなら、瞋恚の害こそは、すべての善行を破り、世間からの信頼を裏切ってしまうものだからである。よくよくわきまえておきなさい。怒りの心は、燃え盛る炎よりも恐ろしいものである。

小さな怒りの火は、やがて周囲に燃え移り、ついにはすべてを焼き尽くしてしまう。お釈迦様は学ぶ者にとってまず第一にのりこえなければならぬこと、それが自分自身の瞋恚の心をしずめることなのでした。

太祖様のお祖母様は、かつて道元禅師のお弟子となり、明智というお名前をいたいた女性でした。その娘として育つた太祖様のお母様が、正しい仮の教えに導かれた、熱心な仏教徒であつたことは想像にかたくありません。修行者として抜群

の力を持ちながら、なお怒りの心に染まりやすい太祖様のことを、ことのほか心にかけていたことでしょう。またそうしたお母様の胸の内は、太祖様ご自身がよくわかつていたでしょう。一触即発の怒りの炎をしずめることができた宝慶寺での経験は、太祖様にとつて生涯忘れられないできごとだつたのです。

『修行御和讃』とともに『影向御和讃』にも、瞋恚を鎮めし喜びに御心明るく満ち満ちてと、ご自身の怒りにうちかつた喜びが詠まれています。



【寝食を共にする修行道場の生活】

みんな／梅花やつてみネイガ』
おらほの梅花講
 横手市平鹿町醍醐
 横手市平鹿町醍醐
 平成十七年
 国安 大智
 十人

「梅花つて何よ?」
 「ご詠歌?なんだべそれ?」
 いつたい梅花とは何なのか、分からぬまま足を踏み入れた十数名。
 それから八年。まだまだひよっ子ですが、今では検定合格に向けての練習も積極的で、楽しく活動しています。

梅花講が出来たばかりの頃、大館樹海ドームでの全国奉詠大会に参加して、同じ志を持つ講員の結束力、パワーに驚いたものでした。ご高齢の方々の、ハツラツとした表情が、強く印象に残っています。

香最寺梅花講員の平均年齢は、若

「梅花つて何よ?」
 「ご詠歌?なんだべそれ?」
 いつたい梅花とは何なのか、分からぬまま足を踏み入れた十数名。
 それから八年。まだまだひよっ子ですが、今では検定合格に向けての練習も積極的で、楽しく活動しています。

いと言われます。そんな中、私は四十代と一番若いのです。四十代後半にして若いと言われるのは、梅花の他には滅多にない事ですが、その若い私が、人生の先輩たちと一緒に過ごす時間は、貴重なものだと感じ

冒頭の、梅花とは何か?それは今も分からぬままです。大きな声を出して、鈴鉦を打ちながらお唱えすること、ボケ防止になると、ある先生がおつしやっていました。そんな風に、あまり気負わずに続けていくうちに、自分なりに何かが見えてくるのではと思っています。

これから先、人生が続く限り、ゆっくり少しづつ梅花と向き合い、より良い生活を送れるように、心がけていきたいと思います。

みんな／梅花やつてみネイガ』 **おらほの梅花講**

るようになりました。日々の生活の姿や、練習に取り組む姿勢は素晴らしく、忘年会や旅行などの年に数回の行事は、それはそれは樂しく盛り上げてくださいます。同志ではありますが、もっと親しみのある、仲間という言葉の方がしつくりきます。私のような若輩が仲間などというには、少しおこがましいのですが。

◆平成二十二年
 ◆九月四日 永光(永平)
 十一日 真清水
 十八日 入寂(高祖)
 二十五日 (太祖)
 ◆十月二日 達磨(和)
 九日 廉然(和)
 ◆十一月六日 影向(和)
 十六日 三十三日 (伝光)
 三十日 永光(總持)
 ◆十二月十三日 誕生(太祖)
 二十日 讀仰(太祖)
 二十七日 法燈(太祖)
 ◆一月一日 良寛さま
 十四日 (和)
 二月一日 成道(和)
 二月二十九日 明星(和)
 二月二十九日 同行(和)
 二月二十六日 交通(和)
 ◆平成二十三年
 二月五日 良寛さま
 二月二十九日 紫雲(和)
 二月二十九日 花(和)
 二月二十九日 達磨(和)
 二月二十九日 法燈(高祖)
 二月二十九日 (和)
 二月二十九日 伝心(高祖)
 二月二十九日 法燈(高祖)
 二月二十九日 (和)
 二月二十九日 不滅(和)
 二月二十九日 高嶺(和)

※ご意見ご要望等をお気軽に
お寄せ下さい。

〒〇一〇一〇一
 秋田市金足岩瀬字前山二
 東泉寺(〇一八一八七三一六七五)

香最寺梅花講員
 佐藤幸子



梅花とスキーを通じて

秋田市金足 東泉寺

副住職 柴田 和明



平成十九年より二年

間のうち合計三十日間、
第十七期梅花流詠讃歌

師範養成所で良き仲間

と共に梅花の素晴らし

さと奥深さを学びました。それと同時期に日

本知的障害者スキー協会のアルペンスキー日

本代表チーム・コーチの委嘱を受け、現在は

僧侶とスキー指導者の二足のわらじを履いて

います。

障害者スキーに携わるようになつたのは、

スキー教師を本業としていた頃に担当した自閉症の女の子が（養護学校入学以前から言葉

を発することがなかつた）、講習中に突然大きな声で笑い喋り始めた出来事がきっかけです。

スキーのみならずスポーツには、単なるレジャーという枠を超えた力があることに気付き、一層その魅力に引き込まれました。

さて、知的障害者アルペンスキー日本代表チームは世界選手権の過去二大会に於いて、男女ともに全種目で金もしくは銀メダルを獲

得しています。次期冬季パラリンピックであるロシアのソチパラリンピック大会より、知的障害者の参加がほぼ確定し、四年後を見据えて更なる強化と新たな逸材発掘に取り組ん

りますが、合宿や海外遠征では実力を發揮できるように、選手それぞれに合わせた健康管理、環境づくりに十分配慮しています。シーズンオフの陸トレ合宿や会議、選手・家族からの各種相談（仕事や恋愛、親御さんからは偏見に対する悩みや嘆きなど）等を通して、長い時間を掛けて障害への理解を深め、信頼関係を築きあげていけるよう努力しています。

完全なボランティアですし大変でないといえば嘘になりますが、私の出来る菩薩行だと捉え続けています。スキーを通じて選手たちと生きる喜びを共に分かち合えることや、選手や支える家族が秘められて可能性に気付き、笑顔になつてゆく姿を見ることが喜びであり、活動の原動力となっています。

梅花の道ではほんの駆け出しですが、梅花とスキーの共通点を挙げるとすれば人生を豊かにする底知れぬ力を秘めているということではないでしょうか。

梅花流詠讃歌のお誓いの言葉を実践すべく梅花を愛する方々との交流を今以上に深め、共にその環を拡げていきたいと思います。それと同時に、いつかは澄み切った青空のよう伸び伸びとしたお唱えが出来るよう、研鑽を積んでいきたいと思います。



梅花行事ご案内

■禪センター梅花講習

【宗侶・寺族研修会】

午前十時半～午後三時半

十月十四日(木) 講師

講題

柴田弘一師範

十一月八日(月) 講師

講題

明星・法灯

二月七日(月) 講師

講題

浅田高明師範

九月十日(金) 講師

講題

梅花・淨光

十月八日(金) 講師

講題

山中律雄師範

十一月五日(金) 講師

講題

紫雲・道交

十二月十日(金) 講師

講題

龜谷隆道・郡亮善師範

正月五日(金) 講師

講題

佐藤晃心・柴田和明師範

二月八日(金) 講師

講題

達磨大師御和讃・廓然

三月十日(金) 講師

講題

三浦賢翁・柳川一童師範

三月八日(金) 講師

講題

正行御和讃・清水道広師範

三月八日(金) 講師

講題

柿崎隆穂・村松良周師範

三月十日(金) 講師

講題

修証義御和讃・伝心

三月十日(金) 講師

講題

鈴木泰賢・郡亮善師範

三月十日(金) 講師

講題

同行御和讃・道交

検定会のお知らせ

～22年度課題曲決定～

今年度の梅花流検定会は、受検者の減少に伴い県北・中央の二カ所で同日開催となります。また、三級詠範と三級教範を受検の方はどちらの会場でも受けられますので満を持してお申し込み下さい。

日々の努力の成果が緊張の山を乗り越えて、歓喜の実を結ぶよう願っております。

課題曲の中から数曲選びましたので、各曲のポイントを押さえながら練習を重ねて検定に臨んで下さい。尚、見台、イス、机をご使用の方は申し込み時に記入のこと。

◆検定日 9月14日(火)◆

【集合受付 9時 / 開講式 9時30分 / 検定開始 10時】

■県北検定会場

大館市幸町15-6 「北秋くらぶ」 ☎ 0186-42-2033
事務局 北秋田市新田目 第10教区 新田寺 ☎ 0186-78-4280

■中央・県南検定会場

秋田市 「さとみ温泉」 ☎ 0188-33-7171
事務局 由利本荘市花畠町 第3教区 東林寺 ☎ 0184-22-3437

●詠範(寺族) 検定課題曲

補教 正法・修証義・紫雲(高祖)より2曲。
詠範補 清淨心・梅花(太祖1)・入寂(高祖)・誕生(太祖)より2曲(和讃は立行)
五級詠範 溪声(永平2)・慈光・地蔵・無常より2曲(和讃は立行)
四級詠範 花祭・歡喜(第2)・明星・不滅・高嶺・追善より2曲出題(※和讃は立行あり)
三級詠範 紫雲(高祖)・梅花(太祖1)・慈光・廓然・讚仰(太祖)・御授戒・慶祝より3曲出題
(※和讃は立行・分節詠唱あり)

●檀信徒検定課題曲

教導 三宝・正法
権正教導 聖号・修証義
正教導 清淨心・紫雲(釈迦)
権中教導 梅花(高祖2・太祖1)・誕生(高祖)より2曲(和讃は立行)
→中教導 溪声(永平寺2・総持寺1)・菩提(高祖)より2曲(和讃は立行)
権大教導 入寂(高祖)・法灯(太祖)・無常・月影より2曲出題(※和讃は立行あり)
大教導 歓喜(第2)・成道・涅槃・觀音・慈光・慈念・妙鐘より3曲出題(※和讃は立行あり)
三級教範 紫雲(高祖)・梅花(高祖1)・溪声(総持寺1)・廓然・讚仰(太祖)・法灯(高祖)
御授戒・慶祝より3曲出題(※和讃は立行あり)

→ 中教導合格にて水色の房に変わる。